

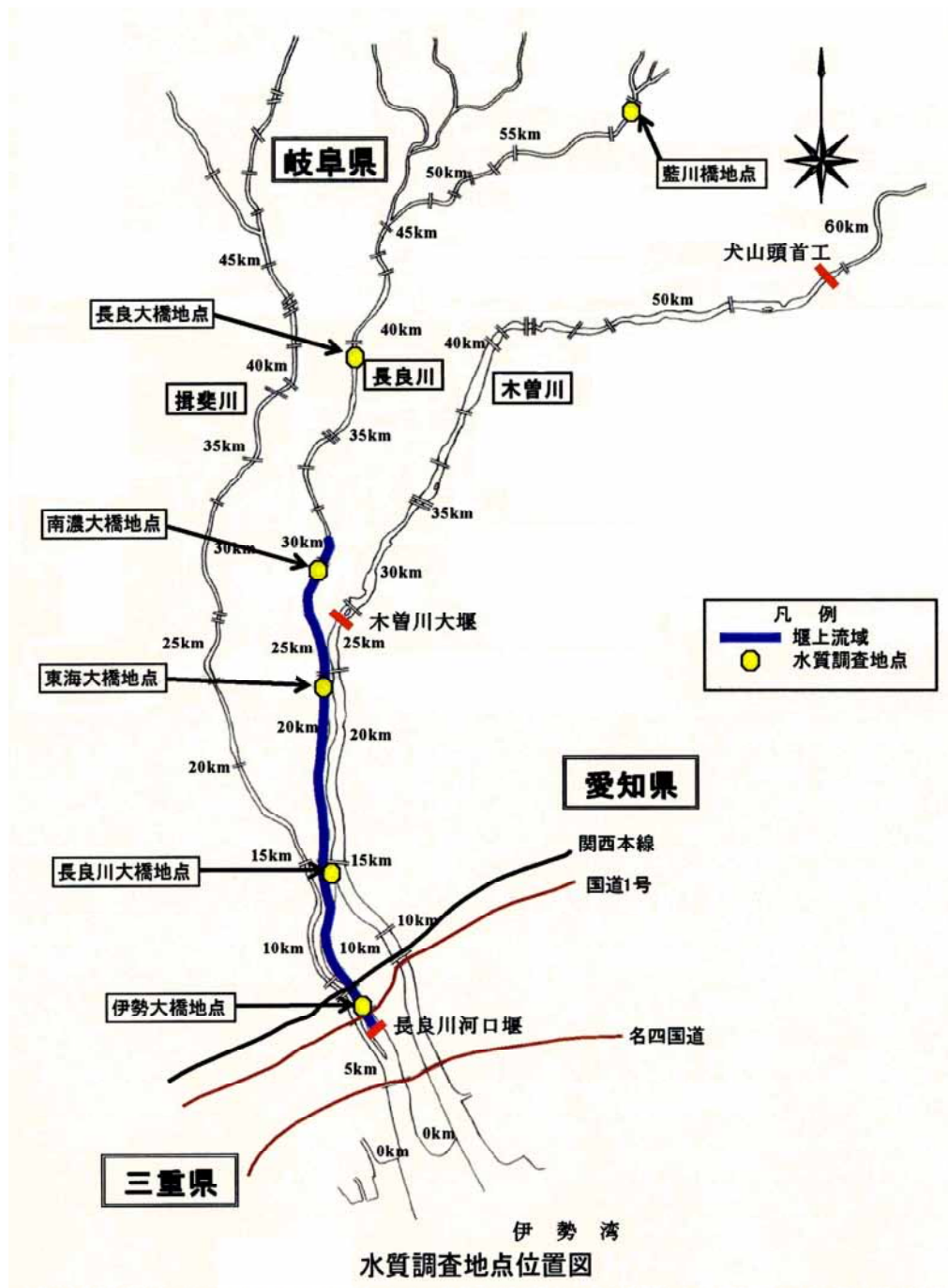
# 環境

## - 水質

### - - 水質

#### - - - 1 水質状況の把握について

長良川河口堰の運用により、堰上流域が汽水域から淡水域となることや、流速が変化すること等による長良川下流部の水質変化を把握するため、水質調査が実施されています。

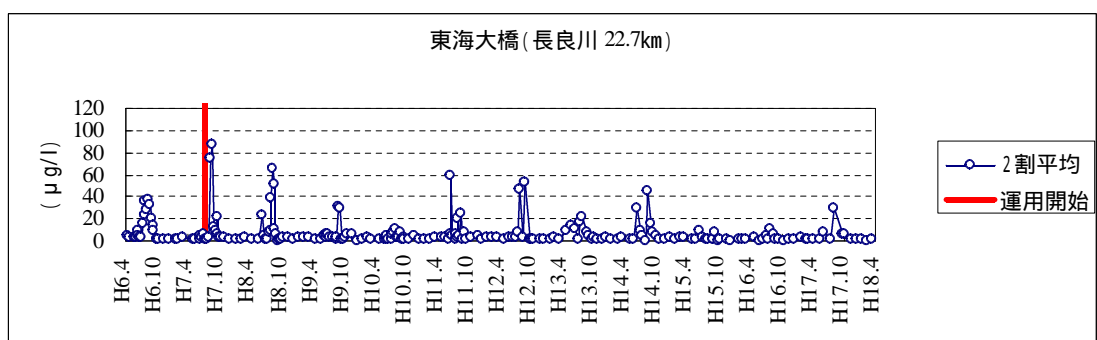
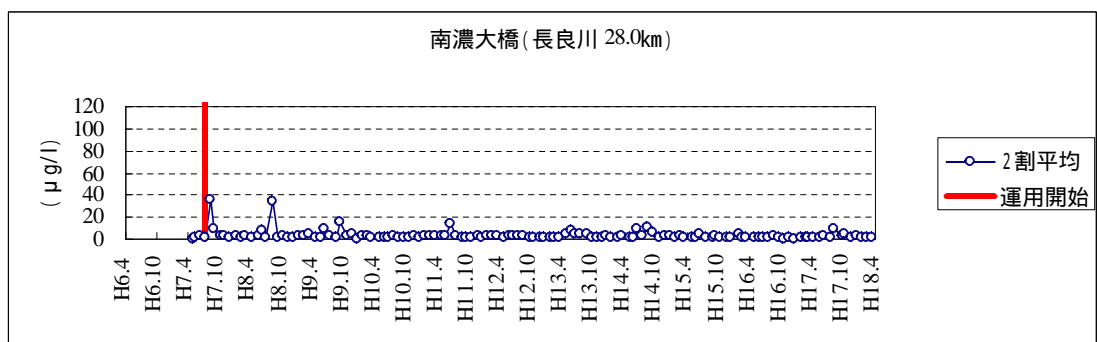
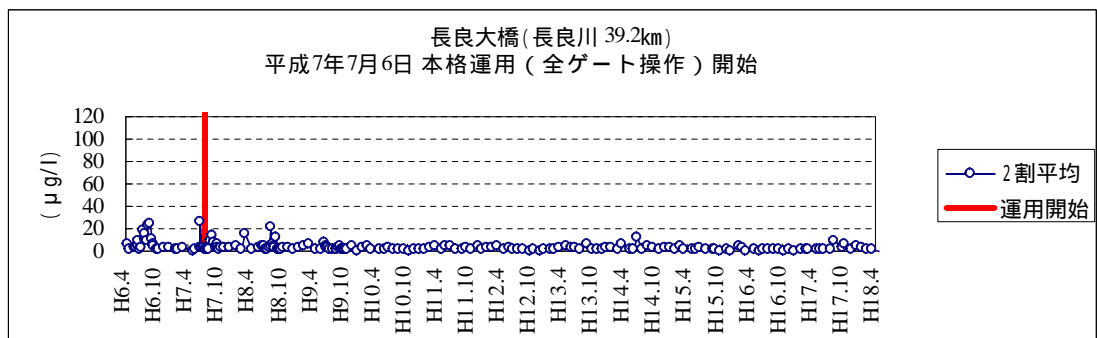


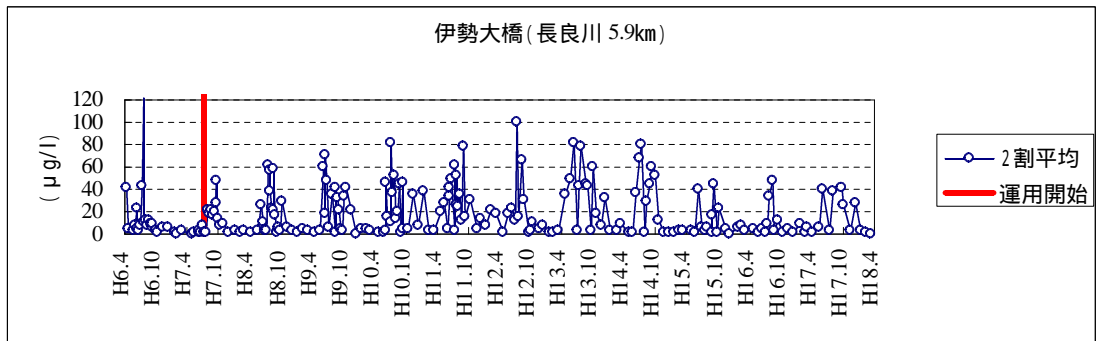
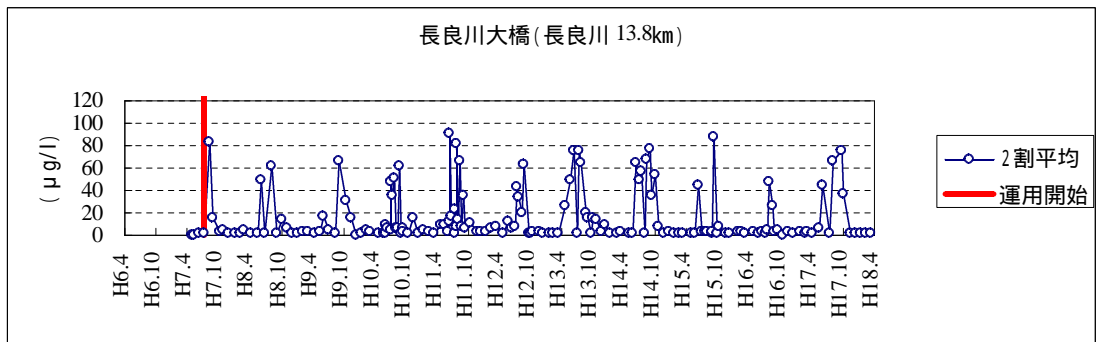
## - - - 2 植物プランクトン(クロロフィルa)について

長良川河口堰上流域は、堰の運用により従来に比べ普段の流速が遅くなります。このため、水温の高い夏期に植物プランクトンが増加することが懸念されました。特に藍藻類が大量に発生するとカビ臭が発生するなど、利水に支障を及ぼすことがあるため、植物プランクトンの調査が実施されています。

堰運用開始後の堰上流域の水質については、植物プランクトン量の指標となるクロロフィルa<sup>1)</sup>に関して、湯水年である平成6年の実測最大のクロロフィルa濃度を初期値として試算した結果、最大で約30 $\mu\text{g/l}$ ～60 $\mu\text{g/l}$ 程度と予測されていました。

しかし、これは堰上流域を1つの培養槽と考え平均的に取り扱った検討であり、局所的・一時的な現象は予測モデルでは表現できず、局所的に植物プランクトンが増殖しやすい環境が形成される箇所ではクロロフィルa<sup>1)</sup>の値は高くなる性質のものであることから、堰上流域の水質を実際に把握することを目的として、定期的に水質観測が実施されるとともに、水質自動観測装置等により水質監視が徹底して行われています。その結果、クロロフィルa<sup>1)</sup>の値は、上述のような性質を反映して、長良川大橋、伊勢大橋などで一時的には予測を超える観測値を示しているものの、予測値が堰上流域の平均的な値であることを踏まえると、全体として予測の範囲内に収まっています。





水質詳細調査 長良川本川(水質項目:クロロフィルa)

中部地方ダム等管理フォローアップ 平成17年次報告書P3-52より

) クロロフィルa

植物に含まれている葉緑素の一種であり、水中のクロロフィルaを測定することにより、植物プランクトン(藻類)の発生状況を知ることができます。

環境白書 岐阜県 環境用語集より

) 2割平均

河川の水面から川底までの深さのうち、水面から2割の深さの平均値のことです。